き藜をくらふ、ふつゝかなる心には、たゞ朝な夕なのいひをこそ覺侍れ、其物をかしぎ出せる器なれば、いかんぞたゞにおはすべき、されば、にや天帝郭巨が孝をあはれみて、あたへ給ふにもこれを以てせり、たま〳〵月夜にぬかるゝものあれば、世のうつとりのためしにひけり、傳へ聞、周の鼎漢の鼎などいひて、兩耳三足五味を和する重器たりといへど、まのあたり見ぬものなれば信じがたくて、かの聖の御代に、三年のみつぎものゆるし聞え給て、民のかまどはにぎはひにけりと、つらね給ひしも、今此飯けむりの事よとゆかしくて、略下

〔日本新永代藏〕白銀百枚歳暮の御祝義

折ふし八木高直にて、今に人のいひ出して、おそろしがる辛酉のとしの、餓死をすくはんとて、御廣間へ願ひ、大坂下寺町大蓮寺にて、粥釜七ッ本堂の庭にならべて、施行せし事かくれなし、

〔好色三代男三〕情の淺さ錢の數ほど

稍ありて昨日の比丘の通る時、内より茶釜の蓋をちやんとならせば、何事もござんせぬかといふて入る、

〔花街漫錄下〕湯茶二ッ口之釜唐銅

この家遊女屋城山九兵衛にめづらかなる釜あり、うちに玄きりありて、口は二ッあり、日毎に内證遊女やにては、主人の居るべき處をさして内證と唱ふれども、なりにふれては主人をもさしていふ也、のゆるりにかけ置て、湯茶と兩樣かねたるものなり、その頃はこの里にては、大かた用ひたるものと見えて、余花明園西村氏が家にもひとつ所持したり、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、略中宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂略中能登釜下略

〔毛吹草三〕近江　辻村鍋釜

釜產地